

## 相貌と性格の仮定された関連性 (2)\*

大橋正夫 吉田俊和<sup>1)</sup> 鹿内啓子  
平林進<sup>2)</sup> 林文俊<sup>1)</sup> 津村俊充<sup>3)</sup>  
小川浩<sup>4)</sup>

### 問 題

われわれはこれまで、印象形成の問題を対人関係の心理学の一環として研究してきた。当初は言語的情報から形成されるパーソナリティの印象、特にAnderson (1962)によって提唱された平均モデル(単純平均モデル)の予測可能性に影響すると考えられる要因についての研究から始められた(大橋ほか, 1971)。しかし、われわれが究極的にめざしていたものは、Anderson (1974)のように、印象形成のデータを材料として判断の一般的性質を明らかにしようとするものでなく、対人関係がいかなる契機で成立し、どのような経過をへて変容するかを明らかにすることである。したがって、同じ言語的刺激を用いるにしても、印象が個々の特性の代数的結合としていかに予測されるかを数量的に分析することよりも、質問紙や面接によって情報統合過程のメカニズムを質的に分析することにより強い関心を向けてきた(大橋ほか, 1973b, 1975, 長田ほか, 1975)。

ところで、われわれが日常生活において他人のパーソナリティ印象を形成する場合、言語的な情報(刺激特性語)だけを手がかりとしているわけではなく、顔や身体的特徴も有力な手がかりとして用いている。とくに初対面の人に対する時などは、その相貌的特徴から相手の性格について判断を下したりすること(いわゆる第一印象)がよくある。このことは、人びとが両者の間にある種の法則的な関連性があると信じていることに基づいている。すなわち、Cronbach (1955)は、人びとが性格特性の

間に暗黙のうちに存在すると仮定している関連性をさすものとして implicit personality theory という言葉を用いたが、それは性格特性の間の関連性だけでなく、相貌と性格の間の関連性もその一部として含んでいると考えることができるのである。

顔や身体的特徴と性格との関連性については、古くから相貌学という名のもとに取り扱われてきたが、それらの説は科学的な根拠の上に立てられたものではなく、その内容は今日の心理学からみて問題にならない部分が多い。しかしながら、それらが全くでたらめであると断定するだけの資料は今日ではまだない。それどころか、それらの中にはわれわれの日常経験からする判断と一致するところも少なくない。科学的な見地からこの問題を取り扱ったものとしては、Kretschmer (1936)や Sheldon (1942)による体型と気質の関連性に基づく類型論がある。そして、これらは現在でも性格心理学の一理論として確固たる地歩を築いている。しかし、われわれが当面問題としているのは相貌学や類型論が説くところの関連性の妥当性ではなくて、個人が相貌的特徴と性格特性の間に仮定している信念が対人的相互作用の場でどのように機能するかということである。もし仮りに、事実としては両者の間にまったく関連がないことが明らかにされたとしても、多くの人びとがそれを信じ、それによって印象形成が規定されるとすれば、その理由からだけでも人びとのそのような信念は社会心理学の重要な研究課題であると言うことができるであろう。

ところで、顔の特徴が印象の形成に与える影響の研究としては、Brunswik (1947)のそれが有名である。この研究では、顔の各部分が何通りかに変化させられ、それらを組合せた顔の線画についての印象形成が行われている。また、日常生活で行われる印象形成場面により近いものとして、顔写真を刺激とした研究も数多くなされている。しかし、顔写真をそのまま用いた場合には、個々の相貌特徴が複雑に絡み合うため結果として形成される印象にどの特徴が寄与しているかを決定することは難しい。このような問題点を克服するために考えられる方法

\* 本研究の結果の一部は日本心理学会第40回大会において報告された。

- 1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)教育心理学専攻
- 2) 名古屋女子大学助教授
- 3) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生
- 4) 愛知県がんセンター研究所疫学部研究員

## 相貌と性格の仮定された関連性 (2)

の一つに刺激を言語的に与える方法がある。そこで前報(大橋ほか, 1976)では、評定という方法を用いてこの仮定された関連性を間接的に明らかにしようと試みた。被験者としては女子大学生を用い、評定にさいしては自分と同性、同年輩の人を想定するよう教示した。調査1では、10対20個の性格特性おのおのをもった刺激人物(SP)が25の相貌尺度(7段階)上で平均的にどの辺に位置すると思うかを評定させた。調査2では、これと反対に、25対50個の相貌特徴について10の性格尺度上で同様の評定を求めた。両調査では別のサンプルの被験者が用いられたし、各被験者には対をなす特性または特徴の一方のみが刺激として与えられた。そして、対をなす刺激の間の平均評定値の差を検定したところ、両調査において共に差が有意(5%水準)となったものが250の組合せの中で195あった。すなわち、被験者は4分の3以上の組合せにおいて、性格特性と相貌特徴の間に関連性を仮定していることが、間接的ながら証明されたのである。そこで見いだされた仮定された関連性は、われわれが予期していた以上に明確なものであった。

しかし、この研究で被験者に求められたのは評定をすることだけであった。したがって、関連性が仮定されたといっても、それはわれわれがデータを分析して推定したのであって、彼らがそのことを意識していることが示されたわけではない。本研究ではより直接的な方法により、この仮定された関連性を明らかにしようとする。すなわち、(1)性格特性対と相貌特徴対を組合せて提示し、両者の間に関連性があるかどうかの判断を求め、(2)なんらかの関連があるとした場合には、それを何に帰因させる(attribute)かを問う。それによって、われわれは人びとが相貌と性格の関連性についてもっている暗黙裡の性格理論がどのようにして形成され、印象形成にさいしてどのように利用されているかを明らかにする手がかりを得たいと考える。

## 方 法

### 1. 調査用紙の作成と被験者

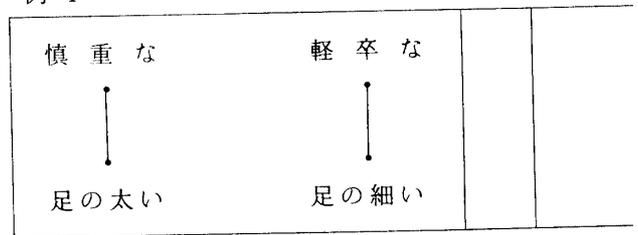
前報(大橋ほか, 1976)で用いた10性格特性対と25相貌特徴対からできる250の組合せをラテン方格に従っ

\* 10対20個のうち8対16個は、大橋ほか(1973a)において、写真からの印象を評定させるのに有効であることが確認された10対20個の中に含まれている。これに「知的な—知的でない」および「内向的な—外向的な」という2対4個が加えられた。25対50個の相貌特徴は、性格を推定するために有効と考えられた40対80個の相貌特徴の中から信頼性の高いものが選ばれた。

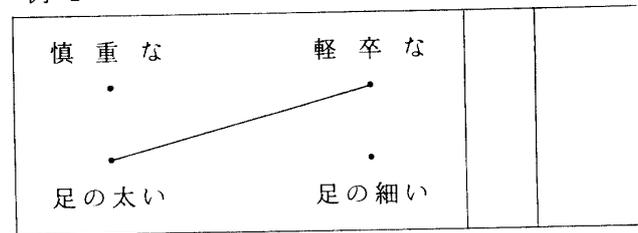
て分割し、各25を含む10種類の調査用紙を作成した。\* 1種類の調査用紙に対して34~36名の被験者(女子大生)が割り当てられた。総被験者数は356名。調査は次の2ステップから成る。

### 2. 関連性の判断

被験者は図1(これは調査票の表紙に記載)に示されるような線の引き方についての説明を受ける。例1は、慎重な人は足が太く(足の太い人は慎重で)、軽卒な人は足が細い(足の細い人は軽卒)と思う場合。例2は、軽卒な人は足が太い(足の太い人は軽卒である)が、慎重な足と足の細いとの間には関連がないと思う場合。例3は、どちらの間にも関連がないと思う場合である。なお



例 2



例 3

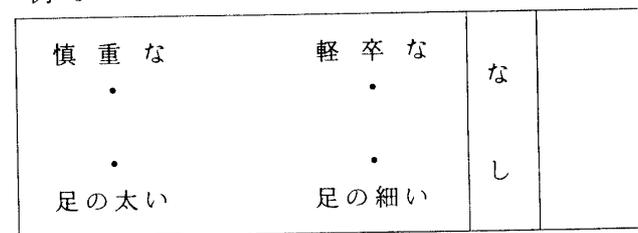


図1 関連性についての判断例

判断に際しては、性格特性から相貌特徴を考えても、逆に相貌特徴から性格特性を考えてもよいこと、自分と同性、同年輩の人を想定して行うようにとの教示がつけ加えられた。25の組合せを判断するための所要時間は、約10分であった。

### 3. 理由の記述

関連性ありと判断して線を引いた組合せについて、その理由の記述を求める。理由の根拠についてはまったくのフリーであることを強調し、書きやすいものから記

表1 関連性の型とその数

相貌特徴	1 積極的な		2 心のひろい		3 分別のある		4 責任感のある		5 感じのよい		6 親しみやすい		7 気長な		8 親切な		9 知的な		10 外向的な													
	H	X	H	X	H	X	H	X	H	X	H	X	H	X	H	X	H	X	H	X												
	16	3	17	9	1	26	6	7	22	7	2	27	1	6	29	17	1	18	17	2	17	2	17	9	1	26	0	16	18	21	3	11
1 顔の大きい	15	2	18	19	1	16	4	10	22	4	9	22	17	2	17	24	1	11	17	5	14	19	0	17	7	23	6	19	4	11		
2 丸顔の	16	1	17	17	1	17	15	2	19	12	2	22	24	1	10	24	2	10	16	0	20	12	3	21	26	1	9	24	2	10		
3 額の広い	18	0	18	26	0	8	11	6	18	8	6	22	31	0	5	31	2	2	30	1	5	27	1	8	5	20	11	20	1	15		
4 ほおのふっくらした	0	8	28	1	5	30	7	1	26	5	7	23	23	1	12	9	2	25	13	3	19	10	3	23	14	1	21	4	7	25		
5 顔のきめの細かい	25	3	8	10	1	25	3	9	24	9	1	24	9	5	21	12	2	22	3	13	20	9	5	21	1	14	21	26	1	9		
6 色の黒い	32	1	3	27	0	9	1	12	23	21	4	11	33	0	1	28	1	6	19	8	9	26	0	10	7	14	14	33	1	2		
7 血色のよい	4	10	22	2	4	30	4	2	30	1	5	30	28	2	6	10	1	23	10	2	23	5	3	28	10	4	22	7	13	15		
8 髪の毛のやわらかい	25	1	9	15	1	20	3	1	32	4	7	25	23	0	13	27	5	4	9	8	17	17	2	16	5	10	21	26	1	9		
9 目のまるい	2	20	14	19	0	16	5	7	24	2	11	23	30	0	6	31	1	4	30	1	5	27	0	7	1	23	11	9	13	14		
10 さがり目の	21	4	11	15	2	19	7	2	26	10	1	25	15	2	19	22	5	9	5	3	28	10	4	22	10	7	17	18	1	16		
11 目の大きい	8	4	23	7	0	29	1	4	31	6	1	28	19	0	17	8	3	25	5	2	29	8	1	27	15	4	17	6	8	20		
12 まつ毛の長い	20	2	12	17	0	18	13	2	21	25	0	11	16	6	13	17	6	13	17	4	15	20	1	15	11	10	15	22	3	11		
13 まゆの太い	4	13	19	11	3	20	6	5	24	5	8	23	18	2	16	30	0	5	32	0	4	18	0	18	0	18	3	22	11	4	11	21
14 まゆの八の字型の	10	3	23	3	11	22	10	1	23	4	5	26	7	11	18	2	23	11	2	14	19	2	18	16	26	0	10	11	7	18		
15 鼻の高い	1	21	15	0	10	26	9	2	25	1	4	29	13	3	19	4	10	22	9	9	18	4	8	23	17	1	18	1	14	21		
16 鼻の穴の小さい	6	6	24	15	1	20	10	2	24	12	6	18	24	0	10	25	3	7	15	5	16	12	3	21	24	3	8	12	8	16		
17 鼻のまっすぐな	31	0	5	12	0	24	1	15	20	7	8	21	6	16	14	15	4	15	11	4	20	10	5	21	9	18	9	26	2	7		
18 口の大きい	12	10	13	16	3	17	8	6	22	15	2	19	6	10	20	16	8	12	12	4	18	20	3	12	5	25	6	16	8	12		
19 くちびるの厚い	23	2	11	11	5	19	34	0	2	31	0	5	33	1	2	9	9	18	3	25	8	11	4	19	34	0	1	12	13	11		
20 口もとのひきしまった	12	2	22	5	3	28	13	1	21	11	0	25	26	0	10	13	5	18	8	3	25	6	2	28	23	0	11	11	7	17		
21 歯ならびのよい	12	2	21	20	1	15	12	1	23	14	0	21	8	4	24	7	1	28	11	2	23	13	0	23	18	4	14	14	0	20		
22 耳の大きい	10	9	15	17	1	17	6	6	24	8	8	20	13	2	20	23	1	12	29	1	6	24	0	12	0	24	12	21	4	11		
23 ふとった	7	6	23	6	2	26	3	1	31	7	5	24	10	2	24	2	15	18	10	2	24	1	6	29	10	2	24	14	5	17		
24 背の高い	25	2	9	18	0	18	6	6	22	18	2	15	8	6	22	10	1	25	11	8	16	13	3	20	0	9	27	23	2	11		

相貌と性格の仮定された関連性(2)

述するよう教示する。所要時間は約20分であった。

がなした関連性に対する反応を示すものである。表には、行に特徴、列に特性の、対の positive と考えられる方のみが記されている。被験者の反応は、何らかの関連性を認めるものと認めないものの2種に大別されるが、前者は1本の線か2本の線を問わなければ方向によって二分

結 果

1. 相貌特徴と性格特性の間の認知された関連性

表1は、250の組み合わせのおのおのにおいて、被験者

表2 有意な関連性とその方向

相 貌 特 徴 \ 性 格 特 性	1 積 極 的 な	2 心 の ひ ろ い	3 分 別 の ある	4 責 任 感 の ある	5 感 じ の よ い	6 親 し み や す い	7 気 長 な	8 親 切 な	9 知 的 な	10 外 向 的 な	計 前 本 研 究	+ の 数
1 顔の大きい	**	* +	+	+	+	**	**	* +	××	**	7 5	5
2 丸顔の	**	**	+	+	**	**	*	**	××	**	8 7	2
3 額の広い	**	**	**+	**+	**	**	**+	* +	**	**	10 9	4
4 ほおのふっくらした	**	**	+	+	**-	**	**-	**	×	**	7 8	2
5 顔のきめの細かい	× +	+	* +	+	**	* +	* +	* +	**+	× +	8 2	9
6 色の黒い	**	**+	+	* +	+	**+	× +	+	××+	**	7 5	8
7 血色のよい	**-	**	*×+	**	**-	**	**	**		**-	9 9	1
8 髪の毛のやわらかい	× +	+	+	+	**	**+	* +	* +	* +		6 2	8
9 目のまるい	**	**+	+	+	**	**	-	**	+	**	6 6	4
10 さがり目の	××	**	+	×+	**	**	**-	**	××		7 8	2
11 目の大きい	**	**+	+	**+	**+	**	+	+	*	**	6 6	6
12 まつ毛の長い	+	* +	* +	+	**	* +	+	* +	*	+	6 1	8
13 眉の太い	**	**	**+	**	*	*	*	**		**	8 7	1
14 眉の八の字型の	× +	+	+	× +	**	**	**-	**	××	+	7 5	5
15 鼻の高い	**+	× +	**+	+		××	××+	××	**	*	8 6	5
16 鼻の穴の小さい	××	××+	+	* +	+	+		+	**	××+	5 4	7
17 鼻のまっすぐな	+	**	* +	*	**	**		* +	**		6 4	4
18 口の大きい	**-	**+	××+	+	×	*	+	+	×	**	7 4	5
19 唇の厚い	*	**	+	**+	+	*	*	**	××	*	8 4	3
20 口もとのひきしまった	**	+	**-	**-	**-		××	+	**-		6 6	2
21 歯ならびのよい	**+	* +	**+	**+	**	*	+	* +	**	*	9 5	6
22 耳の大きい	**+	**	**+	**+	+	* +	* +	**+	*	**+	8 7	8
23 ふとった	*	**	+	+	**+	**	**	**	××	**	8 7	3
24 背の高い	* +	+	+	+	+	××	+	× +	* +	*	5 1	8
25 骨太の	**	**	+	**	+	**+		**+	××+	**	7 7	5
計	23 17 9	19 16 15	11 8 24	12 10 20	17 15 9	23 16 7	15 10 11	20 12 15	20 17 6	19 14 5	179 135	121

註 第1列：前報の結果 第2列：本研究の結果 第3列：「無関係」の反応の多さ

される\*。表中のH型、X型がこれに相当するものであり、後者はN型に相当する。H型とは、表1に表示されている特性と特徴の間に正の関連ありとした反応。X型とは、負の関連ありとした反応を表わす。例えば1行1列では、顔の大きい—積極的、顔の小さい—消極的の両方あるいは片方に線を引いた場合がH型である。また、顔の小さい—積極的、顔の大きい—消極的の両方あるいは片方に線を引いた場合がX型とされる。また、いずれにも関連性を認めず「なし」と反応した場合はN型に属する。

表2の各セルの第2列には、関連性を認める反応のうち、その方向が一方に有意( $\chi^2$ 検定,  $P < .01$ )に偏っているものを示してある。\*は対の表に示された極からみて正、×は負の方向への偏りを示す。表のセルの第1列には、比較のために前報の結果も示されている。また、第3列は、関連性なしとする反応(N型)が被験者の3分の1より有意に多い(+ )か、有意に少ない(-)場合を表わしている。また、表2の各セルの第1および第2列の関連性をまとめたのが表3である。これによると、前報の結果では250のうち179の組み合わせにおいて有意な関連(1%水準)が認められているのに対し、本研究ではその数は135とやや少ない。この差は、本研究が相貌特徴対と性格特性対を同時に与え、それを線で結ばせるという、いわば二分法の判断を求めたことによると考えられる。付加的な理由としては、被験者数の差(前報では約4倍)および自由記述の難しい組み合わせは関連性なしと判断されやすかったことが考えられる。しかし、それでも依然として54%の組み合わせにおいて関連性が認められている。また、両方の結果で矛盾するもの(逆方向の関連性)は1ケース(表2の7行3列)だけであり、逆に両方で関連性についての結果が一致するものは250の組み合わせのうち193、すなわち全体の77%に達している。これ

表3 前研究と本研究の結果の比較

本研究 前研究	*	ナシ	×	計
*	110	40	1	151
ナシ	4	65	2	71
×	0	10	18	28
計	114	115	21	250

\* 全体的に1本の線は少ないし、1本の線だけを引いても理由の記述では、2本の線を引いたのと同じような理由をあげているので、本数による区別は不要と考えた。

らのことを考え合わせると、異なった方法にもかかわらず、両方の結果はかなり一貫しているとみることができよう。

性格特性を尺度別にみた場合、25の相貌尺度との関連性がもっとも強いのは、「積極的な—消極的な」、「知的な—知的でない」の尺度である。反対に、「分別のある—分別のない」や「責任感のある—責任感のない」、「気長な—短気な」では、関連性は比較的弱い。これは、前報の結果ともほぼ一致するものである。つぎに相貌特徴の側からみると、性格特性との関連が強いものとしては「額の広い—額の狭い」、「血色のよい—血色のわるい」などがあり、関連性の弱いものには、「まつ毛の長い—まつ毛の短い」、「背の高い—背の低い」などがある。「顔のきめの細かい—顔のきめの荒い」、「髪の毛のやわらかい—髪の毛のかたい」、「まつ毛の長い—まつ毛の短い」の尺度は、前報と比べると、性格特性との関連性が著しく低くなっている。これらの尺度では、関連性がないとしているN型の反応が多いことがわかる。このことから評定値による前報の結果は、サンプルが大きかったために有意差が敏感にすぎたということも考えられる。逆に、「ほおのふっくらした—ほおのこけた」、「さがり目の—あがり目の」の両尺度では、わずかながら本研究において、むしろ関連性が強く表われていることがわかる。

## 2. 理由の分析

被験者は関連性ありと判断した組み合わせについて、その根拠をあげることを求められたが、時間的な制約もあって、なんらかの記述をしているのはそのうち約70%にとどまった。われわれは、その内容分析から被験者がもつimplicitなパーソナリティ理論の一部を明らかにするための手がかりを得たいと考える。このため、250の組み合わせの中から16を選んで、内容分析のための一応のカテゴリーを設定するために、被験者の書いた関連性の根拠や理由を分類してみた。この16の組み合わせのうち10は同方向に強い関連を示したものであり、6は相反する方向の関連性が比較的多くみられたものの中から選んだ。内容分析をふまえた7人の討議により、最終的に設定されたカテゴリーは次の6個である。

A. 直観型：述べられている理由が実際に理由となっていないもの。つまり、なぜかということには直接ふれられていないもの。例えば、「顔から受ける感じがそうである」とか、「見た感じがそうである」としているもの。「口もとがひきしまっていると分別があって折り目正しい人に見える」というような言い換え。

相貌と性格の仮定された関連性(2)

B. 帰納型：理由はともかくとして，そのような関連が経験的に認められているとするもの。例としては，「クラスにそういう人が多い」とか「自分がそうである」というような記述，「土人や漫画に出てくる人物がそうである」というステレオタイプのなもの。

C. 隠喩型：意味上の連想等により，特徴と特性の間には関連があるのだとしているもの。例えば，「太っている人は考え方も大きい」とか，「やわらかい髪は素直な心を表わす」というようなもの。

D. 媒介型：特徴Xと特性Aの間に何個かの媒介子を

表4 関連性の「理由」の分布

番号	性格特性		カテゴリー						計
	相貌	特徴	A 直観型	B 帰納型	C 隠喩型	D 媒介型	E 論理型	F 情感型	
9 19	知的な 唇の厚い	— 知的でない 唇の薄い	2	8	4	8	0	2	24
3 20	無分別な 口もとのゆるんだ	— 分別のある 口もとのひきしまった	3	1	9	13	0	0	26
5 8	感じのわるい 髪の毛のやわらかい	— 感じのよい 髪の毛のかたい	3	6	1	7	2	8	27
6 9	親しみやすい 目のまるい	— 親しみにくい 目の細い	1	2	0	25	1	1	30
8 10	親切な あがり目の	— 不親切な さがり目の	0	3	1	26	0	0	30
7 14	短気な 眉の八の字型の	— 気長な 眉の逆八の字型の	1	13	1	10	1	0	26
2 4	心のひろい ほおのこけた	— 心のせまい ほおのふっくらした	0	0	3	17	2	0	22
10 6	内向的な 色の黒い	— 外向的な 色の白い	2	1	0	8	11	0	22
1 7	消極的な 血色のよい	— 積極的な 血色のわるい	2	0	1	16	9	0	28
4 13	責任感のある 眉の細い	— 責任感のない 眉の太い	2	2	4	13	1	0	22
1 23	消極的な やせた	— 積極的な ふとった	0	1	1	3	5	0	10
9 13	知的な 眉の細い	— 知的でない 眉の太い	3	1	0	9	1	1	15
1 19	消極的な 唇の厚い	— 積極的な 唇の薄い	1	3	2	2	0	0	8
7 25	短気な 骨太の	— 気長な 骨の細い	1	2	4	3	1	0	11
5 15	感じのわるい 鼻の高い	— 感じのよい 鼻の低い	0	0	6	5	1	4	16
10 20	内向的な 口もとのゆるんだ	— 外向的な 口もとのひきしまった	3	1	3	9	1	0	17
	計		24	44	40	174	36	16	334
	(%)		(7.2)	(13.2)	(12.0)	(52.0)	(10.8)	(4.8)	(100)

おき、その連鎖により説明するもの。ただし、その連鎖にはEのような論理性はなく、飛躍がみられる場合。例えば、「目のまるい人はおどけた感じがして親しみやすい」とか、「ほおのこけた人は神経質にみえるので心がせまい」というようなもの。

E. 論理型：その内容の妥当性はともかくとして、推論が論理的になされているもの。例としては、「外向的な人は野外に出ることが多いから色が黒い」とか、「消極的な人はストレスがたまって不健康だから血色がわるい」というもの。

F. 情感型：自己の感情ないし評価を特徴なり特性に投影しているもの。例えば、「目のぱっちりした人は好きである」とか、「まゆが細い人はいやらしい感じがする」というもの。

これに従って7名の研究者が合計334の記述を独立に分類した。任意の2名の間の一致率は53.7%ないし80.9%の間にあり、平均69.1%であった。不十分ながら一応の信頼性があるといえよう。完全に一致しなかったものについては討議により決定した。16の組合わせごとの分布は表4に示すとおりである。

次に、資料的な意味合いも含めて16の組合わせのおのおのについて記述してみたい。以下の記述では、被験者の生の反応はゴチで記述することにする。

9-19

B型では、唇の厚い人は、土人、野蛮人、低開発国の人を連想させるので知的にみえない、というステレオタイプの記述が5ケースあった。残りは、昔からのイメージ、周囲の人を見て、といったものである。D型では、情熱的な、下品な、淫乱な、といったsexualな特性が、唇の厚さと知的でないを結びつけている記述と、知的な人は、ひきしまった顔だから唇は薄い、という記述が4ケースずつある。

3-20

D型では、口もとのひきしまりが、知的、きちょうめん、まじめな、という特性に媒介されて分別のあると結びつけている記述と、口もとのゆるみが、軽卒な、だらしない、という特性に媒介されて無分別なと結びつく記述がほとんどである。C型もよく似た記述であるが、しまっているときりとしたイメージ、ゆるんでいるとだらとしたイメージ、という語感からの連想により結びつけている。

5-8

この組合わせでは、やわらかい髪は好きである、きれい、素適だ、というF型の記述がもっとも多いが目立つ。D型では、清潔な、女性らしい、柔和な、という特性が、髪の毛のやわらかいと感じのよいを結びつけてい

る。B型では、髪の毛のやわらかい人にはやさしい人が多い、周囲の人から、という記述がみられる。また、数は少ないが、やわらかさによって手入れのよさを感じるので感じがよい、とするE型も2ケースある。

6-9

目のまるい人は、かわいらしい、愛きょうがある、人なつっこい、明るい、といった特性、目の細い人は、いじわる、冷たい、きつい、疑い深い、といった特性に媒介されて、それぞれ親しみやすい親しみにくいに結びつけているというD型の記述がほとんどである、ただ、同じ理由で逆の結びつきを考えるケースも5あるのはおもしろい。

8-10

この組合わせでも、さがり目の人は、やさしい、人が好い、あたたかい、といった特性、あがり目の人は、いじわる、きつい、冷たい、といった特性に媒介されて、それぞれ親切な一不親切なと結びつけているというD型の記述がほとんどである。あがり目がきつね、さがり目がお多福を連想させるから、といったB型の記述も3ケースみられる。

7-14

逆八の字型の眉は、ダルマや漫画に出てくる人物に代表されるように、怒っている顔つきを表わすもの、だとしているB型の記述がもっとも多い。D型では、八の字型の眉は、おっとりした、おだやかな、のんびりとした、という特性に媒介されて気長なと結びつき、逆八の字型の眉は、神経質な、きつい、といった特性に媒介されて短気なと結びつけている。

2-4

ほおのふっくらした人は、あたたかい、やさしい、温和な、といった特性、ほおのこけた人は、冷たい、陰気な、神経質な、といった特性に媒介されて、それぞれ心のひろい一心のせまいに結びつけているというD型の記述が17ケースもある。また、ふっくらしている人は気持ちも大きい、心の中もふっくらしている。心のひろい人は体もふとった感じがする、というC型の記述が3ケースある。その他、心のひろい人は物事を神経質に考えないので体に影響しない。だから、ほおがふっくらしている、というE型の記述も2ケースみられる。

10-6

この組合わせでは、色が黒い人は、スポーツなどに親しんでいて活動性、積極性があるので外向的である。外向的な人は、野外に出る機会などが多いため日焼けして色が黒い、といったE型の記述が11ケースでもっとも多い。D型では、色の黒いが、元気な、たくましい、社交性がある、といった特性に、色の白いが、弱々しい、おとな

## 相貌と性格の仮定された関連性(2)

しい、といった特性に媒介されて、それぞれ外向的な一内向的なに結びつけられている。

1-7

D型では、血色のよいという相貌特徴が、**健康的、活発な、行動的**、という特性に媒介されて積極的に結びついている記述と、血色のわるいという特徴が、**弱々しい、病的な、暗い**、という特性に媒介されて消極的に結びついている記述が数多くみられる。E型では、**積極的な人は活発に行動したり、よく運動したりするので血色がよくなる**、という記述と、**消極的な人はストレスが貯まったり、運動不足だったりするので血色がわるい**、といった特性から特徴を説明していく記述が9ケースのうち7ケースある。

4-13

眉の太さは、**頼りがいのある、たくましい、りりしい**、といった特性、眉の細さは、**軽薄な、貧弱な**、といった特性に媒介されて、それぞれ責任感のある一責任感のないに結びついているD型の記述が13ケースある。また、**眉の太さは意志の強さ、しんの強さを表わす感じがする**、といったC型の記述も4ケースみられる。

1-23

E型では、**やせた人は行動しやすい、動きやすいから積極的である**、とする記述が3ケース、**ふとった人は身体的な劣等感から消極的になる**、とする記述が2ケースある。D型では、**ふとった人は、めんどくさいことを嫌う**、といった行動特性に媒介されて消極的に結びつくという記述が1ケースみられる。これらは、いずれもX方向の関連性をもつものである。H方向の関連性をもつものとしては、**ふとった人は、物事をこせこせ考えないで行動するから積極的である**、とするD型の記述が2ケースみられる。その他、**ふとっていると考え方も大きい感じがする**、というC型も1ケースある。

9-13

9ケースあるD型のうち、**眉の太い人は、力強い、りりしい**、といった特性、**眉の細い人は、薄っぺらな**、といった特性に媒介されて、それぞれ知的一知的でないに結びつけられるとしているH方向の関連性をもつのが5ケースである。これに対し、**眉の細い人は、繊細な**、に媒介されて知的に結びつくとするのが2ケース、**顔全体がすっきりする**、といった特徴に媒介されて知的に結びつくとするのが1ケースある。また、**眉の太い人は、身体が頑丈である**、といった特徴から知的でないに結びつくとするのも1ケースある。これらは、いずれもX方向の関連性である。

1-19

この組み合わせは記述されている数が8ケースで少ない。

H方向の関連性をもつのは、**唇の厚い人は行動的で素直な人が多い、自分がそうである**、といったB型の2ケースだけである。C型では、**唇の厚さが重量感を与えるので口数が少ない、話しにくそう**、といった記述がみられる。D型では、**唇の薄い人は、対人関係がうまい、きついことを言う**、といった行動特性に媒介されて積極的に結びつくとする記述が2ケースある。

7-25

H方向の関連性をもつ記述は6ケースである。そのうち、**骨の細い人は、神経質な**、といった特性に媒介されて短気な結びつくとするD型の記述が3ケースある。X方向の関連性をもつ5ケースでは、**骨の太さが怒りとか頑固なイメージを連想させる**、といったC型の記述が3ケースみられる。

5-15

**鼻の高さは見た目のよさ、美しさを感じさせる**、というF型の記述4ケースと**鼻すじが通っていると顔全体がひきしまるので感じがよい**、とするE型の記述1ケースがH方向の関連性をもつ。これに対し、C型では、**鼻が高い人はつんとしている、いろんなことを鼻にかける**、といった記述が6ケースみられる。D型では、**鼻の高い人は、冷たい、すましている、気どっている**、といった記述がみられる。これらは、いずれもX方向の関連性をもっている。

10-20

D型では、**口もとのひきしまった人は、知的な、社交的な、しっかりしている**、といった特性に媒介されて外向的に結びつくとする記述が6ケースみられる。逆に、**口もとのゆるんだ人は、おしゃべり、とげがない**、といった特性に媒介されて外向的に結びつくとする記述も2ケースみられる。C型では、**口もとのひきしまりが精神のひきしまり、口もとのゆるみがルーズさを感じさせる**、というH方向の記述が2ケースみられる。

全体として、D型の記述が約半数でもっとも多い。B型は、9-19、7-14の組み合わせに多くみられる。これらは土人、ダルマ、漫画といった典型例をもとに特徴と特性を結びつけている。とくに漫画は、社会的に定着しているステレオタイプ的な関連性の代表的なものといえる。E型は10-6、1-7、1-23の組み合わせに多い。これらの特性は、いずれも活動性を表わしているものであるし、特徴は健康に関するものである。F型が出現するのは、特性が感じのよい一感じのわるい、知的な一知的でないに偏っている。この両尺度は、やはり感情や評価を伴ないやすい。また、相反する方向の関連性が均衡しているケースでは、implicit personality theory の個人差も考えられるが、性格特性の意味のうけとり方の差異も

原因と思われる。例えば、9-13の組み合わせにおいて、眉の太い人が知的だと判断する人は、知的をしっかりとした態度や考えとくっつけているのに対し、眉の細い人が知的だと判断する人は、知的を頭の働きの鋭さという意味に解釈している。理由の記述の仕方では、相貌特徴から性格特性へと結びつけていく方が多くみられる。こういったことから、相貌がパーソナリティ印象を形成する場合に有効な手がかりになりうるということがわかる。

以上が16の組み合わせについて、被験者が記述している関連性の理由の列挙、ならびに全体的な総括である。ここで、残りの234の組み合わせについても表4で設定したカテゴリーにしたがって、その記述内容を分類することも考えられるが、先に述べたとおり、なんらかの記述を行なっているのは平均約70%であった。しかも「見た感じから」というような理由とは思われない記述も数多くみられる。理由が記述された頻度と関連性の強度との関係については、何らかの関連性があると判断された数に対する理由が記述してある割合を算出したところ、本研究で選んだ同方向に関連性を強くもつ10の組み合わせでは平均86.8%であった。これに対し、相反する方向を多くもつ6の組み合わせでは66.9%であり、さらに、関連なしとする反応が被験者の3分の1より有意に多い組み合わせ（表2第3列）では、61.1%と少なくなっている。

結論として、関連性の根拠の記述内容は、時間的な制約があったにせよ、調査前に予想していたものよりかなり貧弱なものであった。理由の記述が困難であるからこそ、その関係が implicit なものであるとする考え方も成り立つが、われわれは必ずしもそうだとは思わない。むしろ、被験者に関連性の根拠の記述を求めるといった正面からの方法だけでは implicit な関係を解明するには不十分であったと考える。この点を補うものとしては、被験者のよりナイーブな反応を引き出すための面接等を用い、そのうち面接等に出てきた反応を理由の選択肢として被験者に提示するというような方法も今後有効と思われる。

## 要 約

本研究は、より直接的な方法を用いて相貌と性格の間に人びとがどのような関連性を仮定しているのか、また、その根拠としてはどのようなものがあるか、を明らかにする手がかりを得ることを目的としている。

10性格特性対と25相貌特徴対からできる250の組み合わせをラテン方格に従って分割し、各25を含む10種類の調査用紙を作成した。1種類の調査用紙に対して34~36名の被験者（女子大生）が割り当てられた。調査は次の2ステップから成る。①関連性の判断：性格特性対（ $X - \bar{X}$ ）

と相貌特徴対（ $A - \bar{A}$ ）の間に関連性があると思えば、1本あるいは2本の線で結ぶ。②理由の記述：関連性ありと判断した場合には、その理由を記述させる。なお、判断にさいしては、自分と同性同年輩の人を想定するように、と教示した。

主な結果は次のとおりである。

1. 250の組み合わせのうち、有意な関連（1%水準）が認められたのは135であった。この結果は、評定法による前報の結果よりやや少なかった。

2. 前報の結果と矛盾するもの（逆方向の関連性）は、わずか1ケースであり、逆に、両研究で関連性についての結果が一致した数は250のうち193の組み合わせ（77%）に達している。すなわち、本研究では異なった方法を用いたにもかかわらず、両者の結果はかなり一貫していることが示された。

3. 250の組み合わせから、同方向に強い関連を示した10の組み合わせと相反する方向の関連性が多くみられた6の組み合わせの合計16を選んで、内容分析のための一応のカテゴリーを設定した。設定されたカテゴリーは、直観型、帰納型、隠喩型、媒介型、論理型、情感型の6個である。

4. これに従って7名の研究者が16の組み合わせに書かれている334の記述を分類した。任意の2名の間の一致率は53.7%ないし80.9%の間にあり、平均69.1%であった。不十分ながら一応の信頼性が示された。

5. 資料的な意味合いも含めて、16の組み合わせのおおに記述されている関連性の根拠が列挙された。

6. 最後に、被験者に関連性の根拠を記述するのは難しく、それだけでは implicit な関係の解明には不十分であり、方法論的な検討が必要であることが述べられた。

## 文 献

- Anderson, N. H. 1962 Application of an additive model to impression formation. *Science*, 138, 817-818.
- Anderson, N. H. 1974 Cognitive algebra: Integration theory applied to social attribution. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, 7, 1-101.
- Brunswik, E. 1947 *The conceptual framework of psychology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Cronbach, L. J. 1955 Processes affecting scores on understanding others and assumed similarity. *Psychological Bulletin*, 52, 177-193.
- Kretschmer, E. 1936 *Körperbau und Charakter*. Auf 1. Berlin: Springer.
- 相場 均訳 体格と性格 1960 文光堂

相貌と性格の仮定された関連性(2)

- 大橋正夫・小川浩・長戸啓子・長田雅喜・三輪弘道・千野直仁 1971 パーソナリティの印象形成における情報統合過程の研究(1)——平均モデルの予測可能性に影響する諸要因について——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **18**, 43-60.
- 大橋正夫・三輪弘道・長戸啓子・平林進 1973a 写真による印象形成の研究(2)——印象評定のための尺度項目の選定——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **20**, 93-102.
- 大橋正夫・小川浩・長田雅喜・千野直仁・長戸啓子・三輪弘道・平林進 1973b パーソナリティの印象形成における情報統合過程の研究(3)——面接法によるアプローチ——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **20**, 61-76.
- 大橋正夫・平林進・長戸啓子・吉田俊和・佐伯道治 1975 性格の印象評定における面接法と質問紙法 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **22**, 83-102.
- 大橋正夫・長戸啓子・平林進・吉田俊和・林文俊・津村俊充・小川浩 1976 相貌と性格の仮定された関連性(1)——対をなす刺激人物の評定値の比較による検討——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **23**, 11-25.
- 長田雅喜・大橋正夫・三輪弘道・小川浩 1975 言語的情報によるパーソナリティ印象の形成——意味変容の有無の検討および自由記述の分析による質的アプローチ——名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **22**, 103-115.
- Sheldon, W. H. & Stevens, S. S. 1942 *The varieties of temperament*. New York: Harper.

## ASSUMED RELATIONSHIP BETWEEN PHYSIOGNOMIC FEATURES AND PERSONALITY TRAITS

Masao OHASHI, Toshikazu YOSHIDA, Keiko SHIKANAI, Susumu HIRABAYASHI,  
Fumitoshi HAYASHI, Toshimitsu TSUMURA and Hiroshi OGAWA

This study examines what relation people assume between physiognomic and personality characteristics and why they have such assumed relations, through more direct method than the one in the former study.

Twenty-five pairs of opposite physiognomic characteristics ( $A-\bar{A}$ ) and 10 pairs of opposite personality traits ( $X-\bar{X}$ ) were used. They made two hundred and fifty combinations of physiognomic pair-personality pair, which were divided into ten groups of twenty-five combinations by Latin square. Thirty-four, thirty-five, or thirty-six subjects (female university students) were assigned to each group. On each combination of physiognomy pair-personality pair, subjects were asked at first to draw a line between the words printed if they believe that there was any relation between a physiognomic characteristic and a personality trait, and then to describe the reason for the relation. Subjects were instructed to imagine a person of the same sex and age to them.

The results are as follows.

1) One hundred and thirty-four combinations of the overall (54.0%) showed significant assumed relation. This figure is lower than that obtained in former study which used rating method. However, current and former studies presented quite consistent results in spite of their different methods. One hundred and ninety-three of overall combinations (77.2%) were consistent and only one combination was inconsistent between both studies in their assumed relations.

2) From overall combination, ten which showed strong relations in one direction, and six combinations which showed relations in two direction evenly were selected for the content analysis of reasons for the assumed relations. From preliminary analysis of these sixteen combinations, six categories of the type for the reasoning were established. They were Intuition, Induction, Metaphor, Mediation, Logic, and Evaluation/Affection types. Seven judges classified 334 descriptions written on these 16 combinations into six categories. The proportion of the number of agreed judgements between a couple of judges were ranged between 53.7% and 80.9%, and 69.1% as average. This suggests that six categories may be reliably used for classification of the reasoning for the assumed relations.

3) Subjects seemed to have difficulty in describing the reasons. Such verbal description may be not adequate to elucidate the implicit relations between physiognomic and personality characteristics.

Subjects' descriptions of the reasons for assumed relations and interpretations of their descriptions in terms of six categories were fully presented.